

特集2：歴代編集委員長による座談会

国際ジェンダー学会の未来を拓くために

はじめに：ジェンダーと私

<島>

皆様こんにちは。第20号の編集委員長を務めている島直子と申します。

編集委員会では学会誌第20号の記念にあたって、歴代の編集委員長に学会の未来について語っていただく機会をもちたいと願い、検討を重ねてきました。そして本日、第16号編集委員長の国広陽子さん、第17号編集委員長の田口久美子さん、第18号・第19号編集委員長の天童睦子さんにご参加いただき、座談会開催の運びとなりました。

限られた時間ですが、大いに語っていただきたいと思います。さっそくですが、自己紹介からお願いします。

<天童>

こんにちは。

この学会には国際女性学会だった時代から関わっていますので、それなりの年月おりますが、自分の成長の場が国際女性学会であったということは申し上げたいと思います。1990年代、私自身としては30代半ばの子育ての頃に、母校の東京女子大学に社会学の修士課程ができるということをつままたま知って、一念発起して大学院に戻ったという経緯があります。

国際ジェンダー学会になって、私にとって青天の霹靂だったのは、何を間違えたか会長を仰せつかりました（第6期）。そのときは名古屋にいたのでお引き受けできるだろうかと思ったのですが、今考えますと、地方にいる会員も学会の運営体制にしっかり関わる、それが国際ジェンダー学会の良さでもあると思います。

編集委員会には折に触れて関わらせていただいたのですが、学会誌は学会活動の柱ですので編集委員長という役目は重く、意義を感じつつも責任が重いなと思ひながら務めました。

研究領域は女性学、教育社会学、育児、そして災害女性学です。今、宮城にいますが、東日本大震災からずいぶん経ったものの、女性や子どもをめぐ

る課題は山積しています。地域から何ができるのか、それがグローバルな問題とどう関わるのか、このあたりが長年の研究課題となっています。

<国広>

よろしくお願ひします。

1970年に大学卒業ですが学生時代はジェンダーにまったく関心をもっていませんでした。概念自体を知りませんしね。天童さんは30代で大学院にお戻りになったということですが、私は40代のはじめに大学院生になりました。横浜市立大学が社会人大学院生を募集するというを知り、横浜市民は入学金免除というのにも惹かれて1989年に受験しました。

学部では経済学を勉強したので経済学のテキストを読み直してみたのですが、「女の人生」のような話は全然出てこなかった。経済学ではないなと社会学を選びました。女性の先生につきたいと希望していたら大学院に矢澤澄子さんがいらして、運よく拾っていただきました。

上野千鶴子さんや江原由美子さんの著作、ナタリー・J.ソコロフなど翻訳が出て、日本社会学会大会でも「ジェンダー分科会」が登場した頃です。矢澤先生は都市社会学がご専門だったのですけれども、ジェンダーの視点について先生も一緒に勉強する時期だったので。勉強が本当に面白かったですね。ワクワクドキドキしながら学びました。

再就職しようと思っても、4歳を過ぎたら、当時は再就職の道はほとんどなかったですね。キャリアの再構築に悩んでいたら、国際女性学会を立ち上げられた岩男寿美子教授（慶応の学部時代の恩師）からお誘いがあり、アメリカで出版する日本女性についての本の仕事を1年間手伝うことになりました。それが終わる頃に、「博士課程を受けないの？」と訊かれ、「えっ、受けていいのですか」「ダメもとで受けたら」と。なんとか慶応の後期博士課程に進みました。

博士課程にジェンダーのコースはなかったのですが、岩男ゼミを中心に性差別、女性学、「主婦」を勉強しました。国際女性学会の月1回の例会で修士論文の内容を報告させていただくなどしているうちにどんどん深みにはまった、というのが原点です。

<田口>

皆さん、今日はよろしくお願ひいたします。

私も、学部時代はジェンダーとか「女性のあり方」とかにほとんど関心がありませんでした。ただ、学部4年の研究室が福富護先生だったので。教育心理学や学校教育に関する研究室がたくさんあるなかで、福富研究室はちょっと異質だと思われていたような時代でした。国際女性学会が発足3年ぐらいの、

これから大きくなっていくぞみたいな時代で、ちょうどベティ・フリーダが東京に来た年でしたけれど、私としては「ふーン」みたいな感じで聞き流していました。

私は、修士課程を修了して非常勤講師などをしていたころ、福富先生から国際女性学会というものがあるから入らないか、と誘っていただきました。でも「結婚もしているし今後どうなるか分からないから、学会に入ってもちゃんとできるか分からない」というような、今考えるととんでもないことを言っていました。自分自身はジェンダーにあまり意識的ではなかったのですけれども、実生活としては無意識のうちになにか感じていたのかなと思います。

ジェンダーということを目覚めに気にするようになったのは、結婚したり子どもができたりして、まさに「自分の問題」になってからです。私は非常勤生活が長くて、夫に帯同して地方に行ったりしながらだったのですけれども、仕事は続けたいと思っていました。当時本当に大変なことをやっていたなと思いますけれど、子どもが1歳半のころ、週1回、広島から東京に行って仕事をするという選択をしたのですよ。国際女性学会（当時）の中には同じような人がいましたし、原ひろ子先生からも、「3年くらいやればなんとかものになるわよ」とエールをいただいていたので、私の中ではそんなに違和感はなかったのですが、他の学会の人からは「そんなことして、子どもはどうするんだ」とかすごい言われようで、落ち込んだこともありました。東京に行く当日、ベビーシッターが来ないので社宅の人に預けたりなど、今思えばすごい生活だったと思いますが、なんとか繋いできました。2年ちょっとで東京に戻ったのち、地方に正規の仕事（子連れで単身赴任）を得ましたけれど、家族の事情などで長続きしなかったこともありまして、トータルすると非常勤の生活がすごく長かったです。

ただ非常勤のときも、国際女性学会や国際ジェンダー学会があったおかげで研究を支えていただき、学会や大会の事務局などもしながら、研究から離れずにいることができたことを有り難く感じております。

前身の国際女性学会だったころ、分科会にかなり頻繁にコミットさせていただきました。他の会員の方が子連れで参加していて、最初は「えっ」と思って目が点になったのですけれども、これが普通なんだなと、女性がいろいろな人生を送りながら研究していくというのは、こういうことかなと。そのあと、まさに自分もそうなるわけなのですけれど。

<島>

皆さん、最初から研究者志向とかジェンダー志向ではなかったけれど、国際ジェンダー学会でエンパワーメントされたんですね。だからこそ、学会にこれ

だけ愛情をもって関わってくださっているのかなと思いました。

<天童>

私が東京女子大学の大学院にいたのは1993年からの2年間ですけれど、95年に村松安子・村松泰子編『エンパワーメントの女性学』（有斐閣）が出版され手に取りました。国際女性学会のメンバーも複数執筆者に名前を連ねていて、「エンパワーメント」というキーワードは私の中で大事なものになりました。後に国際ジェンダー学会になった頃でしょうか、国広さんを中心に地域における女性のエンパワーメントDV研究会という分科会が立ち上がり、そのあとケア文化とジェンダー研究会になりというように、国際女性学会のときから、グループで研究の種をまいてみんなで育てるという学び合いがありました。

さらに田口さんのお話の通り、社会人経験のある方が多かったです。社会人から大学院生になるという人は、生活の「しんどさ」と「楽しさ」を抱えています。それで「女性が女性を支える」みたいなことが体現される学会なのではないかと、お二人のお話から思い出しました。

<国広>

単に学問的に女性学を学び、研究するだけではなく、生き方を支え合うという意味でね。そういう学会はあまりないかもしれない。学会を立ち上げられた岩男さんと原さんが個人的にも社会的にも助け合っていたのを傍で拝見していました。アカデミアに「女の人」が珍しかった当時、女性同士が競い合うというより助け合い、支えあうというあり方が、この学会の屋台骨になっているのではないかなという気がします。会員同士の関係性を大事にするということが、私たちの代だけでなく、そのあとの会員にも、繋がってほしいですね。

国際ジェンダー学会の未来を拓くために

<島>

お話いただいたような学会の歴史をふまえて、今日の本題である「国際ジェンダー学会が取り上げるべき国内外の課題は何か」という点について伺います。

<天童>

担当した特集のテーマを振り返りながら、お話させてください。

私が担当した2020年第18号の特集は、大会と連動した企画です。AIとジェンダーやSTEM領域の女性の少なさということが社会的な議論になった時期に、「デジタル化はジェンダー平等に寄与するか」という特集テーマが組まれました。

2021年の第19号はコロナ禍が続くなかで、本学会誌で初めて公募型の特集を組みました。これはとても充実した内容になったと自負しております。公募に先立って開催した説明会にも様々な会員が参加して下さって、編集委員会マターで新しい研究ネットワークができるかも、という可能性を感じるものでした。

創刊号から第19号までの特集を振り返ると、テーマは多様ですが、一貫しているのはジェンダー視点だということです。政治、環境、育児、教育、放送、文化、キャリア形成、震災後の支援、災害時暴力、女性活用、DV被害女性などがこれまでの主なテーマでした。これをふまえて、今後学会として取り上げるべき課題という点で、3つほど挙げようと思います。

1つ目はテーマです。これからの新しい社会的課題では、コロナ禍がきっかけになると思うのですね。「災害女性学」の本を出したとき繰り返し主張したのが「平常時にできないことは、非常時にはもっとできない」ということです。コロナもある意味、非日常的なものですけれども、平常時のジェンダーアンバランスとか、平常時に潜んでいた差別的な行動や価値志向が、非常時に一気に浮上する。「コロナ禍とジェンダー：ローカルとグローバルをつなぐ」という第19号の特集で、まさにこの点を浮き彫りにできたと思います。

2つ目はアプローチをどうするかということです。私としてはフェミニストリサーチとか、アクションリサーチというものをあげたいのですが、「どんな方法で」「何に」アプローチするかというときの一つの手法ですよ。例えば社会学とか、心理学とか、様々な既存の学問が「男目線」というか、「人間=Men」みたいなのがあって、では、どんなフェミニストアプローチがあるかということ、一つは「生活者の視点」というものがあるかなと。それから災害の問題を扱っていると、「どんなにしんどいときでも人権を忘れない」と言いたい。それが人権アプローチです。

フェミニストアプローチでは、認識論が重要だと思うのですね。「誰の目で」「何を見て」「何を語ろうとするのか」。さきほどあげた、フェミニスト・アクションリサーチ、もしくは参加型のアクションリサーチで共通しているのは、既存の集団の人たちの意思や活動を大事にし、ともにアクションしながら、変革に結び付けていくということなのだと思います。どういうふうに整理し、取り上げていくかという部分は、学会誌で大いに議論したら良いのではないかと思います。

3つ目は、国際比較研究を積極的にやってはどうかと思います。誰が音頭を取るのかとか、予算が関わることなので難しい面はありますが。何が気になっているかということ、宮城県内の農村部をまわったとき、国・政府とか大都市と

いった「中央」で議論されている女性問題と、「ルーラル」や「ローカル」で議論されている女性問題にかなり温度差があるのではないかと思います。「ローカル」というのは地域に根差した課題で、例えば農業をどうするか、環境をどう関わらせていくか、さらには、そこにデジタルがどう関わるのかといったあたりのことです。フィールドリサーチに根差した新しい手法で、新しいテーマを語るメンバーが国際ジェンダー学会からどんどん出てくると、頼もしいのではないかと思います。

<国広>

私はどちらかと言うと隙間産業タイプ。今でこそジェンダーは重要視されつつありますが、私が学び始めた頃はごくごく少数派。だからこそ研究するうちに、主流派が気が付いていないところを掘って、結局全体をひっくり返すというようなダイナミズムを感じました。

フェミニスト視点は世界の多くの国々で主流化しているのに、日本は大幅に遅れています。見えにくい岩盤構造があって、動かないのですよね。それが今回、安倍元首相の襲撃事件を契機に、政治のあり方に根差しているところがはっきりしてきたと思います。日本のジェンダー政策が進まない根幹は、そこにあるかと思うほどです。宗教団体に政治がコントロールされている。民主主義が根付いていない。それなのに民主主義国を偽装している。人々はそれに気づきながらもどこかで許容してしまっているという、日本社会のあり方ですよね。戦後、民主主義とか人権とか、それが確立しているかのように信じるふりをするので社会を成立させてきた。でも、それが虚構であるということがある種ははっきりしてきましたね。世界に広がる独裁の動きと本気で向き合わず、やり過ぎしかねない。

ただ、フェミニストたちは各国でそれぞれ命がけで活動しています。闘うべきは何か見極めて、それと対峙するコアとなる存在を共に目指す、それぞれエンパワーメントですよね。私自身は社会運動の中にそれを見出そうとしてきた訳ですけど、力不足もいいところでした。どういう動きをとらえ、誰とどんな関係性を切り結んで研究をしていくか。研究者として個々の研究者が関わっていると痛感します。

幸い、国際ジェンダー学会には多様なジャンルの研究者がいて、しかも枠にとらわれずに共同研究をしてきた伝統があります。経済学とか政治学に比べたらマイナーな領域だとしても「世界を変えるのはマイナーから」というのが私の信条なので、そういうところを強い意志を持って開拓して行ってほしいなと思います。

それからもうひとつ、「人生100年」時代になりましたよね。にも関わらず、

現役でないとなかなか研究が続けにくい面もあるわけです。苦勞して勉強を続けてきて、しかももう怖いものがないわけですよ、失うものがないから。そういった方々の力が生かせるような方向性もあっていいのかな、という気がします。

というのは、若い研究者は今の状況だと「就職するための研究」をこなすことを求められ、そちらに流れざるを得ない。私が担当した第16号で「国際ジェンダー学会の明日にむけて」という特集を組んで、若い方々に焦点をあてた背景にはそうした危機意識がありました。「したい研究」がしやすいよう支援する、励ますといったことを学会としてできないかなと思ったからです。

一方、自治体ではジェンダー関係の事業が心細い状況です。1995年前後の男女共同参画が勢いを得ていた時代は終わり、女性活躍と一方では謳いつつ、管轄部署が統合されたり、行政的にはすごくパワーが落ちているように感じます。かたや学問としてのフェミニズムの方は、パワーがついてきていると思います。でも力をつけて先鋭化する一方、いわゆる市民というか、学問研究をしていない人々との距離は離れているような気がする。印象論ですけど。

若い方々は先端的の研究をしたいだろうと思うのですが、引退した世代はそんなこともない。のんびりでいいと思うし、市民と学問の間をもうちょっと分かりやすい言葉で埋める、「そんなに難しくないのよ」と伝えるような役割を果たせるかなと思っています。

<田口>

私も、お二人がおっしゃったようなことがすごく大事なのかなと。天童さんの「生活者に根差す」というところと、国広さんがおっしゃった「人生100年」というところ。若い人は業績主義とポストの少なさという問題を抱える一方、だんだん高齢になっていく会員の方々では、どういうふうに研究をしていくかといった 이슈があります。両方の気持ちをすくい上げながら一緒にやっていくというところ、国際女性学会の始まりのころの助け合いというか、原先生が「誰でも研究できる」ということをしきりにおっしゃっていたことを思い出します。どんな状況であっても研究を進めていくことができるような学会のあり方、温かさといったものを引き続きもってきたいなと思います。

あとは国広さんがおっしゃった「偽りの民主主義」。本当に今、グローバルに社会が危ない方に向かっているわけですよ。結局、「暴力には暴力で」という流れになっていこうとしている。いろんな人と結束して「暴力には暴力で」ではダメだよね、というアクションを起こしながら、それをどうやって学問に発展させるか。まずは、国際ジェンダー学会の中で考えることも重要かなと思っています。

2つの課題：「生活者の視点」と「世代を超えたエンパワーメント」

<島>

多岐にわたるお話をまとめるのはなかなか難しいのですが、国際ジェンダー学会やその前身の国際女性学会では、ジェンダーに絡み取られながら研究を続ける会員同士が支え合い、エンパワーメントし合ってきたというベースをふまえて、2つの課題が出されたのではないかと思います。

1点目は、生活なり現実なりから乖離することなく、弱い立場にある人たちに必要とされる研究をするにはどうすれば良いか、という点。「ローカルとグローバルをつなぐ」「偽りの民主主義」といった点は、大きなヒントになるかと思っています。学問としてのフェミニズムと市民の距離が離れているというお話もあったのですが、では、どうすれば市民や一般の方をエンパワーメントする研究ができるのか、が一つ。

2点目は、「業績のための研究」を強いられがちな若手が「やるべき研究」をするために、「人生100年」が視野に入り始めた会員は何ができるだろうか、という点です。

<天童>

島さんのコメントに関連して言っておきたいことがあるのですが、いいですか。私自身が日常生活にどっぷり浸りながら問題意識をもって研究者の端くれになった人間なので、あえて言いたいことがあって。

やはり学会誌を出している以上、もちろん現実的な問題は山ほどあるのだけれども、理論的枠組みをどう出すかという、アカデミアの使命があると思っています。「女性社会学」ということを80年代に言ったドロシー・スミスが“The Everyday World as Problematic”，つまり、日常生活世界こそが問題だと言ったのです。日常生活のいろんな問題を当事者として、ある意味痛みをもって経験している私たちが、そこからある種、普遍的な枠組みをどう出せるか。

学会誌には、分野を超えて読んでもらい、新しい発想を理解してもらおうという大事な役割があると思うので、理論的枠組みが学会誌の内容として相応しいかという点も、吟味の柱になるのではないかと思います。無論、実証的研究の妥当性というものも問われるのだけれど、そのときのアプローチとして、多様なフェミニスト・リサーチのようなものが必要ではないかという意味です。

2つ目は、70年代後半ぐらいから言われてきた「平等、開発、平和」といったことを学生たちに授業で話すと、ひしひしと受け止めてくれるのですね。田口さんがおっしゃったとおり、国境を越えた課題に向き合うということも、国際ジェンダー学会ならではの課題のような気がします。

<国広>

国際女性学会、そして国際ジェンダー学会は歴史分野の研究者が少ない印象を受けます。学会誌でもジェンダー史、女性史関係の論文がみあたらないように思います。

今の社会状況を捉えるには、歴史的な視点がすごく重要だと思うので、分科会ができるといいかなと。それぞれのジャンルを超えて、ジェンダーの視点で現代史を見直すような勉強をしなければと、私自身の反省も込めて思います。

<天童>

国際的なジェンダーの文脈の歴史について、我々世代にとっては「ついこの間」のことが、若い世代にはもはや近代史・現代史だということ。そしてその近・現代史の部分、高校までではあまり習ってこない。

例えばここに集っている我々は、ある種70年代の日本社会の変化をダイナミックに経験した世代です。でも、今の20歳ぐらいの人たちにとっては、かなり遠い昔です。例えば、学部2年生ぐらいの学生にとって何が困難かと言ったら、生理ナプキンを買うことだったりするわけで、私が所属するミッション系の女子大学で比較的穏やかに過ごしている彼女たちでさえ、コロナでアルバイトができなくなり、親の就労だって不安定になった。仙台という地方都市でも、「女性の貧困」が逼迫している。政治は全然、遠い話ではなくて、すごく身近なものになった。それでさっきお話しした開発とか平和とか、コロナ以前には他の国の話だと思っていたことが、今は自分の足元の問題になっている。そういう意味で、政治的関心が高まっている世代と接している感じがしています。経済的厳しさみたいなのを、彼女たち世代は肌感覚で実感しているのですよね。

<島>

政治とか、平和とか、生き延びるということをひしひしと感じている世代に、国際ジェンダー学会は何ができるでしょうか。

<天童>

ジェンダーデモクラシーといった、ある意味「正論」を伝えていく役目はあるのではないかしら。「民主主義は大事なんだよ」とか、「あなたは尊厳をもって生きる存在だよ」ということを、きちんと伝え続ける役目はあるような気がする。そういう意味でも、ジェンダー視点からの近代史は欠かせないですよ。

<田口>

天童さんがおっしゃるように、日々の授業の中でも、できることがいろいろあるのかなと感じますね。学生たちは日本の状況にうんざりしています。日本は先進国なんて威張っているけれども、後進国じゃないかと。若い人のほうが

分かっているのですよね。そして一部には、「私たちが変えていくんだ」みたいな力強い声もあったりしますので、そうした声を広く伝えていながら、学生たちのエンパワーメントというか、意識化を図れたらいいなと思う。

あとは40代後半ぐらいから上の人たち。世代でわかるのもどうかとは思いますが、家庭科の男女共修はすごく大きかったのではないかなとみています。1989年に学習指導要領が改訂されて、1993年から中学校で、94年から高校で家庭科が男女共修になった。やはり、男女で同じ教育を受けるということは、男女格差を是正していく大きな一歩であると思います。

「私が高校のときは、女子が家庭科を学習し、男子は剣道とか柔道をしていた」といった話をすると、学生たちはびっくりするのですけれども、これもひとつの歴史でしょうからね。今でも学校教育の内容以外に、有形無形で男女の格差が染み付いていて、そのへんを丁寧伝えていたり、意識化を促すということは無駄ではないかなと。

<国広>

若い世代で男女平等とかフェミニスト的志向が広がっているということですが、「意識は変わっているのに、制度が変わっていない」という面は大きい。そこは政治とメディアの変化の遅れが響いている。では、なぜ意識は変わったのかなと考えます。共働きしなければ暮らしていけない経済的側面が拡大しているのに女性が働きにくいことへの不安や不満、その辺りでしょうかね。さっき天童さんが理論的枠組みの重要性を指摘なさったけど、新しいフレームワークが必要なのではないかと思います。

それから先ほど、天童さんから農村の問題も提起されました。私も最近は過疎の農村で暮らしているので、関心があります。

<天童>

さきほど私が「地方、特に農村からいろいろなことが見える」と言ったのは、聞き取りをすると「大学に女を行かせるなんて」とか、今の話とは思えないような言葉を言われた経験が出てきます。農業のやり方自体は、もうダイナミックに変わっているはずなのだけれども、風習や慣習レベルで因習的価値観が出てきます。

地域から見えるものとは何かというと、都市部の女性活躍推進では勝ち馬に乗った女の人、たとえば近代家族のあとのポスト近代家族で、仕事も、夫も、子どもも手に入れて、みたいな人がいるけれど、ローカルから見ているとそれは本当に遠い話ということです。現実のせめぎ合いがあるみたいなことも、国際ジェンダー学会誌なのか分からないのですけれども、今の日本では言っていかなければいけないなと思います。

さきほどから共有しているように、国際ジェンダー学会は女性のエンパワーメントに非常に寄与している。女性のエンパワーメントに親近性をもつ男性や性別カテゴリーから自由な人が、もうちょっと加わりやすいような風土が広がってもいいのかなと思います。

さいごに

<島>

お話は尽きないのですが、残念ながらそろそろお時間になってきました。最後に「これだけは」ということはありますか。

<田口>

では、ひとつだけ。先ほど家庭科の男女共修の話をしましたけれども、教育ではなかなか変わらない部分もあります。その象徴が、学校の女性管理職がなかなか増えないということだと思います。政治的な背景をバックにしているような政策が下りてきますし、地方の事情もありますので、一筋縄にはいかないところもあるのかなと思います。

一方、世界的な流れに乗っていかねばいけないということで、女性差別を撤廃しなければいけないという動きもあるでしょうし、障害者権利をしっかりと盛り込まなければいけないという動きもある。「教育」というのはすごく大きなものですから、多面的に見ていくことが必要かなと思いました。

<国広>

定年後に小学校の副担任として再就職している知人女性に聞くと、再雇用の場合は定年の設定がなく、70歳でも75歳でも続けられるそうです。再研修もないまま、ジェンダーを学ぶこともなしに教鞭をとり続ける。今、教員が足りないから、急場しのぎの策なのかもしれません。この「高齢化」問題に興味があります。「人生100年時代」に起こることは多様ですね。長老というか年長者が経験知だけで仕事を続けることができる仕組みが教育現場にあるのはいかかなものか。「長老」的存在になると、誰も間違いを指摘してはくれないから自身も気付きにくい。高齢者の活躍自体を否定するわけではありませんが、ジェンダーや人権の問題にかかわること、とくに教育の場で年長者支配はまずい。日本の政治も同じ。「長老」自身は、支配しているつもりはなく、役に立ちたいだけなのでしょうけれど。これ、いろいろな活動で最年長メンバーになりつつある私の自戒も込めて。

<天童>

さきほどの歴史のこともそうなのだけれど、政治・経済といった王道のどこ

ろを、もうちょっとちゃんとやってもよかったかなと思う。学会誌レベルか、学会全体レベルか、両方あってもいいのですけれども、「経済はシステムが変わらないと動けない」ということと、「実践から変えていく」ということなら、システムがよりよく変わる方途をも考える必要があります。

G20のエンゲージメントグループであるW20 (Women20)に参加したのですが、世界19カ国とEUの「世話好き女性たち」みたいな、年齢もファッションもさまざまな人たちが集まって、わあーっといろんな議論をして文書に入れていく。世界のあのパワフルな女の人たちは、みんな地元で力強く発言していて、実際に自分でビジネスをやっている方が多くいます。そういう人たちの中で、そのときのキーワードが、やはり「教育」なのです。これは世界共通だった。やはり教育だよ、と思っているのが最近の私です。

<田口>

すごい、ここでプロジェクトが始まる。

<国広>

「人生100年」を意識したプロジェクトというのは、これまでは高齢者福祉の領域が多いのだろうと思うけれども、もっと広範に、教育だけでもなくて、ですね。

<田口>

たしかに、教育はとても重要だけれど、教育だけではない。

<天童>

「人生100年時代の女性のエンパワーメント」。

<高野>

座談会の前半では、お三方とも、ご自身の子育てと並行しての大学院等での学びをとおして、ジェンダー研究に導かれ、良き師・仲間と出会い、自分の成長の場の一つが国際女性学会・国際ジェンダー学会であったことを話されました。後半では、国際ジェンダー学会が拓くべき未来について、研究テーマや方法論、ネットワーク形成など多彩な観点から意見が交わされました。

会員が交互に支え、助け合う本学会の精神と伝統を継承するとともに、「人生100年時代の女性のエンパワーメント」という新たなプロジェクトの提唱があり、実りある座談会を終えました。

社会の変化に主体的にかかわり、豊かな未来を拓くために、国際ジェンダー学会が果たすべき役割は大きいことを再確認しました。温かくも深く鋭く、示唆に富んだ議論を展開してくださいました国広陽子さん、天童睦子さん、田口久美子さんに深く感謝申し上げます。